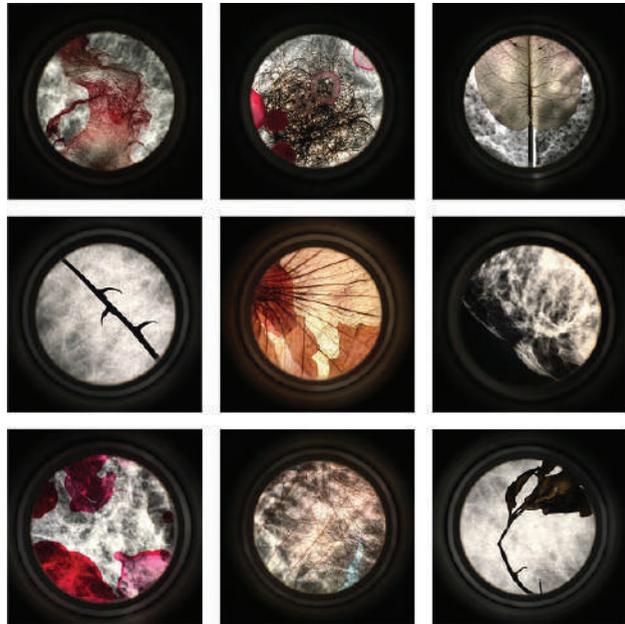


Patssy Higuchi Fernández
Lima, 4 de octubre de 1972
パッツィ・ヒグチ・フェルナンデス
1972年10月4日、リマ

Patssy Higuchi Fernández
パッツィ・ヒグチ・フェルナンデス
1972年10月4日、リマ
1989年にペルー国立高等自治美術学校に入学、絵画を専攻し、1994年に卒業。
リマやハバナを中心に国内外で個展やグループ展を開催。個展の中では、「Parto Normal」ペルー北米文化会館ギャラリー、リマ、1994年。「Blancas Maravillas」パラフェルナリア・ギャラリー、リマ、1996年。「Debuta en Sociedad」地方造形芸術デザインセンター、キューバ、ハバナ、ルス・イ・オフィシオス通り、2002年。「Así se toman las medidas」プンクトウム・ギャラリー (Galería Punctum)、リマ、2003年。「Fragmentaria, tomo I」オスワルド・グアヤサミン美術館 (Casa Museo Oswaldo Guayasamín)、キューバ、ハバナ、2017年。「Las Preguntas」ルイス・ミロ・ケサダ・ガーランド館、リマ、2017-2018年。「Mapa Doméstico」カサ・デ・ラス・アメリカス・ラテンアメリカ・ギャラリー、ハバナ、2018年。



長子シリーズ
2021
Impresión por inyección
en papel de algodón
mate, photo rag bright
white 100 x 100 cm cada
una / 寸法: 100 x 320cm



自己診断シリーズ I 2021
マットコットン紙へのインジェクションプリント。フォトラグブライトホワイト
Impresión por inyección en papel de algodón mate, photo rag bright white. 寸法: 180 x 295 cm

「Aprendizaje de los miedos」第14回ハバナ・ビエンナーレ、2022年、外務省インカ・ガルシラソ文化センター、リマ、2023年。グループ展では、「Cuerpos Volátiles. Representaciones para un fin de siglo」、プロジェクト「El Laberinto de la Choleddad」としてのグループ展、スペイン文化センター・ギャラリー、リマ、1999年。「Emergencia Artística」リマ記者協会、リマ、1999年。「Encuentro Nacional de Grabado」ウィフレド・ラム現代美術センター、ハバナ、2000年。
「Benjaminiana」スペイン文化センターギャラリー、リマ、2002年
「Un vistazo a la Colección Vistacorta」1986年～2015年作品選「ラウル・ポラス・バレネチエア会議場、ペルー、リマ、ミラフフローレス、2015年。「Mediating Self」ケイマン諸島国立美術館、英国、2017年。「Transpacific Borderlands: The Art of Japanese Diaspora in Lima, Los Angeles, Mexico City and Sao Paulo」全米日系人博物館、米国、ロサンゼルス、2017年。

2001年にハバナで開催されたカサ・デ・ラス・アメリカス第7回若手画家賞に参加し、入選を果たした。2004年には、エクアドルのクエンカで開催された国際絵画ビエンナーレで作品が展示された。
キュレーター：ホルヘ・ビジャコルタ (Jorge Villacorta)。

Aprendizaje de los miedos 恐怖の学習

Patssy Higuchi
パッツィ・ヒグチ

7 de septiembre - 29 de septiembre
2024年9月7日(土)～9月29日(日)
10時～18時

注意点
*月曜日は休館
*月曜日が祝祭日の場合には、翌日が休館となります。



私たちは生きるために自分に物語を語る。
ジョーン・ディディオン (Joan Didion)

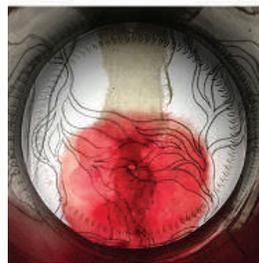
ジョルジュ・バタイユ (Georges Bataille) は、最も有名な著書のひとつを次のように始めている。「人間の精神は、最も驚くべき強迫観念にさらされている。絶えず自らを恐れている。」恐れるとは、恐怖を抱くことである。バタイユは、恐怖は多かれ少なかれ人間の生活に存在するものであり、それを影からだけでなく、形作り、支配する存在として認識することが必要であると述べている。恐怖は、時に出現し、まるで分身のように見えるが、それは自分自身から切り離されたものではなく、自分という存在と完全に一体化したものだからだ。

COVID19による死者のニュースは、言葉では言い表せない、身近で、かつ巧妙なものであり、それらに接した彼女は、すぐさまレンズを通してあらゆるものを観察し、並べたり崩したり、整えたり乱したり、渦巻きにしたり解いたりしながら、万華鏡のような構成を次々と作り出していった。そのどれもが他とは異なるが、連続していることから、それぞれが他のものの複雑さや緩慢さを露呈する。

作品の材料は、選び抜かれた破片やくずと混ざり合い、実験的な使われ方をしている。時に重なり合い、見分けがつかないが独自の物語を創り出すような連想の連鎖を心の中に生み出すのだ。

Jorge Villacorta Chávez

ホルヘ・ビジャコルタ・チャベス



Serie Virus I

2021

Impresión por inyección en papel de algodón mate, photo rag bright white. Medida modular 120 x 295 cm

恐怖とは、無限に再生する頭を持つヒドラのようなもので、その全体を把握し理解することは不可能である。

ヘラルド・フェルナンデス・フアレス

(Gerardo Fernández Juárez)、
ホセ・マヌエル・ペドロサ
(José Manuel Pedrosa)



恐怖は、複雑で定義し難い感情である。様々な側面と在り方を持つ恐怖は、私の人生に常に存在し続けてきた。私は、決してそれに近づかないようにしてきた。ある人にとっては幼稚（大人になることはそれを克服すること、勇気を持つこと、勇敢に振舞うことを意味するという考え方と対立するもの）と分類され、またある人にとっては、苦しみや死を連想させるこの時代の象徴、あるいは思考の一手段と見なされるものであるが、私にとっては深い悲しみへの道を開くものだからだ。

2020年3月初め、ペルーは保健衛生上の緊急事態を宣言し、強制隔離が発令された。社会的隔離は、私が自分の恐怖について追及し始めるきっかけとなった。

人の身体の移動が止まり、恐怖から人生を考え直すことが先送りできない状況になり、ポール・ヴィリリオ (Paul Virilio) が私たちの社会について提唱する考えを見直すようになったのは、その時だった。マスメディアがもたらす即時性、感情の同調を可能にする瞬時性を有するスピード社会。パンデミック時のリマのように、多くの人々が好んで、あるいは必要性から、インターネットを使って仕事をし、互に関わり合うようになった。本当にブレーキをかけ、立ち止まって、私たち全員に関わることを考える機会を作ったのだろうか。身体が動かないということは、どのように解釈されたのだろうか。時間において、生活において、人生において、この一時停止の間があったのだろうか。それでは、どのように恐怖をコントロールし、恐怖とともに、また恐怖の中で、恐怖を抑え考えることができるのだろうか。ホセ・アントニオ・マリーナ (José Antonio Marina) は、幼少期における人格形成の一部として、恐怖の習得を考察し、養育者とのやり取りにおいて、恐怖がどれほどの力を持ち得るか話し合う。しかし、このパンデミックが突き付けた、予測不可能で制御不能で不確実な事態に直面した時に私たちが学んだことは、どうなるのだろうか。もし、私たちがそのような出来事に対して行動し、対処することができないのであれば、その出来事が引き起こす感情を鎮める力を得るにはどうすればいいのだろうか。

恐怖は、その中に知識への深い欲望を携え、私たちの記憶の中にまで留まり、私たちの中に宿るものを利用する。強制隔離が始まって間もなく、一連の写真の制作を始めるために選んだのがこの空間だった。私は、実験室での実習のように、その瞬間に私に恐怖を与えるものについて、考え、分離し、名前をつけ、限定して姿を与えようとする作品を考え出した。これらの一連の画像は、私の恐怖から派生する痛みや悲しみを追求するプロジェクトにもなっている。

Patssy Higuchi

パツィ・ヒグチ